今様櫛

初編

へ 13
2922
1

へ13
2922
1-3

王
六十貳号

門 へ13
號 2922
巻 1

イ ヨ
貸本所
松山本町二丁目
野中栄三郎

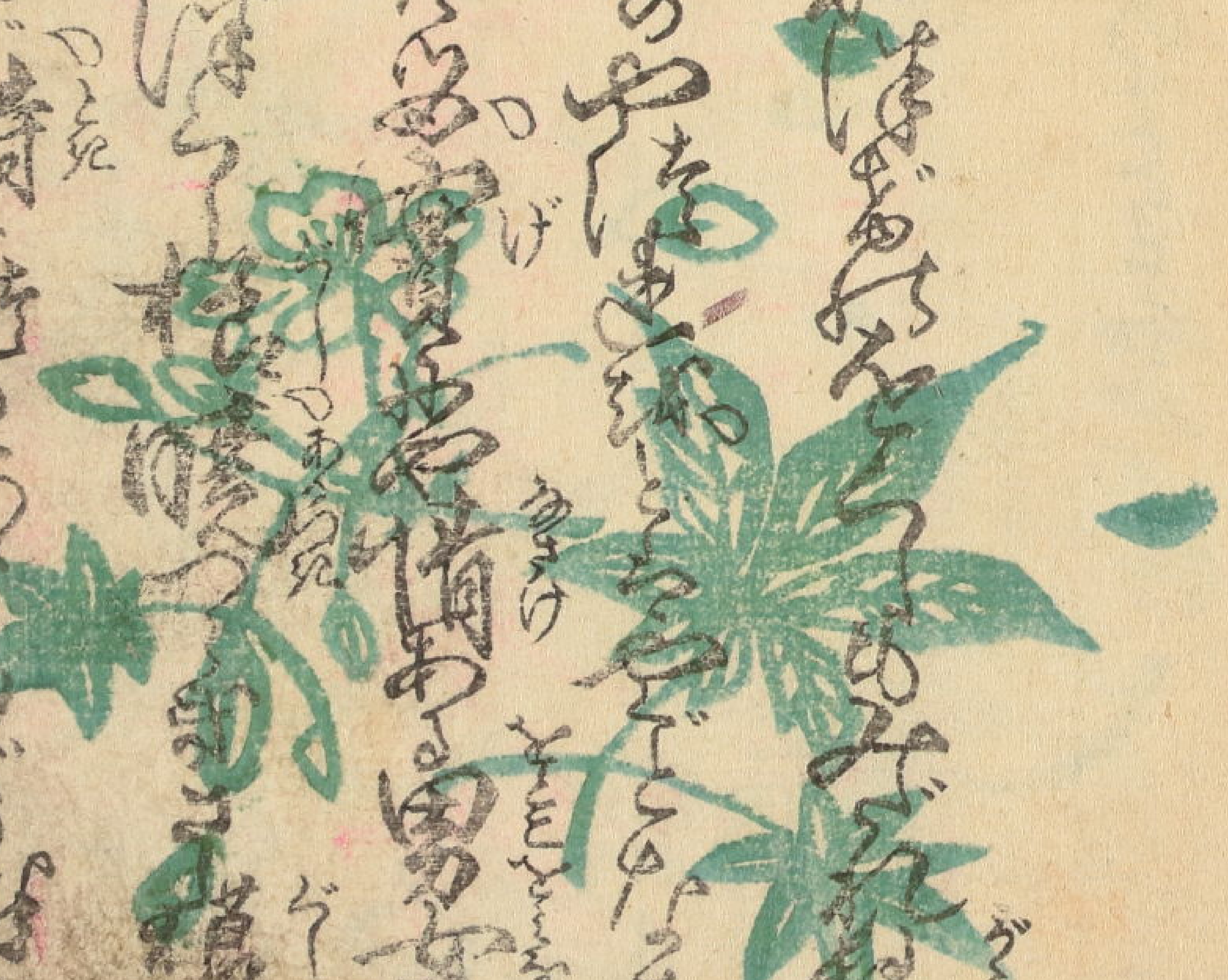
昭和九年七月十六日
購求

9-7-6 結

序

晨貝撰

戯集はすみれしやはらかなるつゝみぞ藝
さうもけしづゝぬ書のやうにまきなをふみ
御読習道をひらきなほ情ある男女の
手ならひもいやとはらぬ教の
さても古代ちのそんねて時にしたがつてすこしは



ゆかりの色を尊み卑しき人の風俗とてその葉の
よろこびを代々にかはらぬ色とてはづかしからずや
甚だ賞翫せしはよろこびの色を尊みけれは
筆をすてんとおもふなり愛翫之余ならば
端書をせよとて身をもあらはしめ
いとゆるやかにて此のてうしを何のとがめぞ

よみ奇流くひろがりなん
思ひのくやはり墨染の我が筆を
玉ふをきらひのものこしのこの趣き
のちのとしやよひ
風月楼のあるじ
高敷

[印]
[印]

娘阿春
娘阿秋
郷兵衛が悴
梅太郎

歌妓絲吉
大畠村の漁人綱八

仇競今様櫛　巻之上

第一回　かころぶ花

紀山人戯作

そもそも引の山鳥は雌雄眠床を一ツにせず。山の尾上を隔てて寝るが。暁天の日に映じて。雄の初尾に移る影を。雌のやうに思ふ嘴をあはせ人よんぞどろのかごとしなすなり。交をなす東合する奇話なり今は六百余年の昔右幕下柳都に治國要を開きて萬民皈伏なせる頃おひ是も鎌倉雪の下尾池小路

いふ処に。家主の郷兵衛といふものあり。別して貧しくはあらね
ども。萬おもふにまかせざるが。先の郷兵衛は実躰なる性にて。人
にも用ひられけるが。男子一人ありて家督をゆづりしも。今の郷兵衛は其
跡へ入夫せしものなり。原来はよしある武家の浪人なり。幼
さなきより学問を好みしかども。苦労少からざれども。天性心ざまよからぬ人
なく。下をあなどり富る人へ媚へつらひく。おのれが栄利のこ
とを事とせしが。今は主人にも男子一人出来て。先代の跡
なる惣領は梅太郎と呼ぶ。器量利発人の常ならず学文を

次郎とて。兄は少しも似ず。父に似て横しまの心のみ見えけり。
しかるに郷兵衛の妻おやすの為に兄なりける。比企が谷の金沢
屋瀬兵衛といふ者の一人の娘ありしが。天性美麗にして。花
も羞るばかりなるに。そのこゝろざしまでやさしく。幼き時
より両親に。孝行に仕へしかば。父母の寵愛かぎりなかりしぞ。
瀬兵衛は前に病死しけるに。その妻はなげき悲しむのあ
まり。終にうつゝともつかず。おもきやまひつゞいて身まかりければ。跡を
相続すべきものは女子といへその兄娘お春僅に十歳のこ

かゝる中にその後見ハ由きとぞたかねより。伯母の事なれバ。おやその八
郷兵衛にくれられける。金澤屋の跡諸事とり片づけ。不用
なる品ハこと〴〵く賣拂ひ。その料ハ人に預けおき。其ほかなる分ハ身に
付べきものとし。あるひハ両親の菩提のために寺へ茶湯料をおさめ
どそまでくに納め。終におそる所をひきとりて。いまだ子のでくにひとり
しまくてそだてあひなり。然るに月日のたつもはやく。梅太郎も
今年十九歳。菊次郎ハ十七歳。お春ハ十五歳になりぬ。梅太郎
ハそのうまれつき顔かたち美しく。手跡もよく。歌の道にも心をよせ。

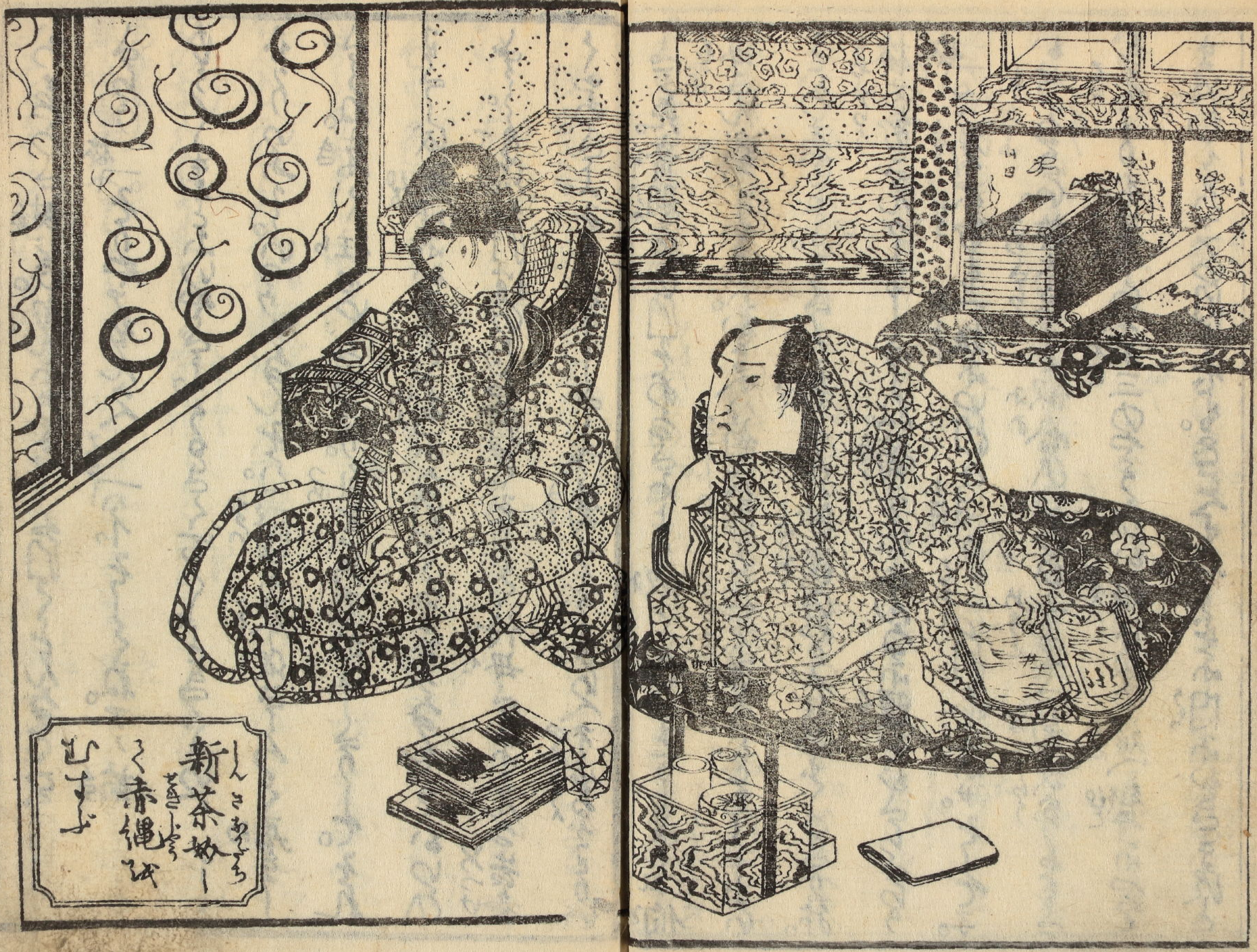
よろづ何をさせても性よく。只實情に厚きことありて。両親に
孝行をつくし。人とまじらひ遊ぶ事を樂しとせず。又お春とも
直なる生まれつきにて。利發ものなれバ伯父伯母と實の両親の
おくに孝行を盡し。且容顔もすぐれたる美人にて。諸芸
廣しといへども。在鄕美目よくうつくしき女ハ又外になく
なきまでしと。なべて評判するより。近所の人もいつしか一對の
夫婦であらんと。迄にいひけるより彼等が異名を陰にて。
尾池小路の京雛とぞいひあへりけるぞ。その事離いかなる

菊次郎ハ傍に。かゝるハお菊がつまがめのふせんと。子供心の中
よりおもひ居る事なれバ。春きつゝ妬く思ひ居り。梅太
郎もうちとけより。そのお菊が心の中ハ。何とぞして折もあらバ
と思ひのうちふ。もはやおくてまく。人目の関の繁きてとひいまだ
年もゆかず。何ぶん恥かしきやうなれバ。いひよる事も夏虫の胸
のこがれ居たりけるが。お菊も梅太郎が美しき男ぶりにこゝろ
とられき。かの別かゝる事情のつくところなれバ。おぼえし良利の
縫物も。いつしか目にさへ東の事も。小袖の妻よりよぎわなれバ。

嬉しさハ娘心に仕立おろしの恋衣対のひとへにむすばれて
枕のひふ御ありさるなり。ある日御亭主夫婦ハ。長谷の境内
まで。大岡く光業寺の百観音開帳あるとて参詣に出ゆきて
しが。留守なれバ梅太郎ハ一人居間に本を読みくみ居りしがお
りし下女ハ二階なれバ。髪を結ふて居る。小菊次郎ハ毎日宿ゆへ
寄つかず。抜足歩行み。忽ちよりありしと。お菊ハ貴入まく
梅太郎のそばへ持出た「モシおふくハ入ましたか。
がやとまかせんか 梅「アイそれハありがたい。御念の入た事さ 菊「ア殿勤

らしいね。あたしは誠に物がたりの様へ。どうぞそうして実の妹のやう
にあつかつてくださりまし　梅「そしてやア妹のやうにやアおもひや
せん　ちる「なぜでおざりますえ。お気に入らねえ事がわるいだらうなら
ゆるしお呵りなすつてくださりまし　梅「気に入りすぎて居るからさ
ちる「なぜうござんすわり　梅「十二実に妹といふものは連れ添ふ女房のやうに
もおもへねえものだが。それもこの門ちがひだわりかとおもひやす。おまへの
やうな人は直にわるい事と思ひのうちはやがてそれともこの門でも。
つれ立ッて出るべきのさ　ちる「あの子は、おだまさんが子。此門だや芝居へ出

さうだ。音羽屋が此門でそちらによく似て居るとやらいつて子供
母さんがおつしやるのは。おまへは菊次郎と梅太郎ではどちらがよいの
とおつしやるから。そりやア菊さんは沙漠のやうでいやだといふわ。
梅太郎さんがとやしてね。菊さんがどんなに腹をたてちやうだらう
梅「今で菊次郎も一ばんに此門で持たアね　ちる「此門でもおかせ。そして子。
お前のおもひは梅太郎と似合ひござる女房ぢやアないさ。菊次郎もなきまね
お妻よりも美しい粂三のやうだ。お嬢さまの役へ似合ひさ
まアおまへはまア此門までもどこへでもやつぱりお内にゐるとまアと


新茶娘し
く赤縄
むすぶ

おつかやつて二階へね。わたしがうまくして、何でもどんなにでもござゐまし
よう 梅「それやアわたし久 きく「ハイ。そしてくね。アノ菊さんと
のろけまさふいやだよ。うるさくて〳〵。ときどきいやゝなる
むかしのはなし。いつでもわたしがそばへ二階の琴をさせてゐます
てね。きく柱とやらをかしたり。爪をとつてかしたりして。それ
はまア絃を埋にあてゝ。色っぽい所をくまなくするんだもの。おいらも
ずつと自分の所はのくやしいもの。そして伯母さんはさんざ苦労
くあてよ。そうしてさ。菊さんがいい人だ不器用なもの。

マア役者にしても人のよく兄貴は惣領の甚六だらう。
おいらは若羽屋の菊とかいふ字が名頭についてゐるからどう
しても色男だもんだから。てめへがかんで美艶風だつてりいひ
だらうのらくしゆくんはしだよ 梅「うつちやつておきなせへナ。
わたしはこのごろは喜瀬川さんへおきやくしてゐるおかみさんの。
あの本はのみちや門と拝借してもらつたらう 郎「
琴曲集だ。アゝよくござゐましたよ。アノよく写しく書てあ
ござゐますだらうの子 梅「そうさ。コウお春さん。あのへんはとう

実情に惚ぬいて居るぜ　てう「うそばつかり　梅「十二人
ならべ侍の中で四朝が間まるのを　てう「ほんにそうかへト
のひきうくる侍　梅「かゝさんは実に二人と夫婦のやくそくあるんだ
歓しかゝるを
さるかよろのもちはそうかのふ　てう「マアそうしとかんざしく彼様に
おつしやるのぶおまへさんでも　梅「そんなうつしや相手ぢやアマア
こちら人おちお母へト　自惚を言ひ　てう「アレサ人が来ると　梅「ナニ
かうしくれもそト　云ながらその手をひきとそのわふのあつひ
なるきなる水のそてどもさすぞちぎるを
こきぞそで
あるゆへか　お妻はそでにめく男の肌より分髪より見そめぬる。
逸の中も新法まつておもてより潤く艶を交し。次第に紛
ものてあり。切くもこまやかに募てまく。後には他人の目にも
きしぶるのみなく。近隣の人の目にも夫とみやぶられ畢くも
その年も暮く明ゆけばお妻は十六才になりぬ。この正月の
頃よりして女ねがひのかなひけるが。母は甚く悦びこの二人を娶
あはせんとおもひしてゐたるに。和合は意中にまかせて父郷
ある家に生れも何くしらずおひつかひ。その幸はものがたる郷
夫婦ともに不興氣なく。左右の田畑もまたよくまさつて先

愚人首もあまたそのほどよしく置べしとのおしへぞ母は懐妊
ずらふりてありしが。やがて十月を指折つ待ありけるが程なく臨
月に至りしが安々と玉のやうなる男子を産しけり。然るに
郷兵清八がこゝろのうちに。梅太郎は器量発明人に勝りけれども。
悪しくはあらねども日ごろ読書や学の道よりのことうき身
とを厭しく風流を好むより。欲ばかりにはならねど馬鹿のものなりと云ひ
て。己が横道の心にかなはず。弟の菊次郎が悪者と交遊ぞ
ふるは至極心にかなひて相続人と定めんとおもひよりし。梅太
郎とはかゝる手跡もよく。学問を好むものゆゑに相応の人
はきおひもなる事ならば一廉の物持なる大商人か武家
なりとも高禄の家へも養子につかはさば二つなき全兄良計
なりと。そのことよくよく妻にも語りしかば直きこゝろの
おやゑのは快く。日ごろより弟は気に入らねど。弟を外へつかはさで
その道とおもひ兄もじぶん我世となしたらば。身上持をもしらねど
もおなじことく。この事をいさめしと。左右あひざる先の家子なり
しが。そのうちかゝる事になりしより。母もさすがにころびてく。

むづかしき父の気に程よくとりなし。終に近処の人までも。言号せしもありけるやうに思はるゝ程なりけり。梅太郎はもちろんお蘭もなほや表向晴ての夫婦のごとくふるまひ。両個ともむつましく家の中むつましく出生の子は蝶よ花よといつくしみ。いよく孝行おこたりなくくらしけるが左右郷迄も歓びけるとぞ

第貳回　花ぞの衣

扨も梅春の両人は。なほのむつましき中なりしが。そのうまれしめでたく。生まれたる児をば柳之助と号けて。掌の玉と愛しくしけるが。よの中に一条の悲き出来たり。そのよし家尋ぬるに。琵琶小路といふところに。金貸を渡世とする荻原屋村次といふものあり。諸大名家へ仕送りし。且は廣く金銀貸数多の地面を所持しく。家豊饒にくらしけり。郷べ名の名多くませる地面も。ありけるこの荻原屋の持物。あるに村次に一人の女子あり。名をお秋とよべり。門前やより梅太郎を見そめく深く慕ひつまし。人めをまとひのそく。ひとり胸のとまでくし

徒に慕ふもはや十七の。花の莟との枝ぶりハ。又憎からぬ優風
俗。終にハ恋病にわづらひ著く。漸くに重るより。両親ハいと〳〵
うれはしく。ちゞめおとゞハ療治をせんとのこゝろもひろけれど。針
灸薬餌の験もなく。大家の高名な出入の医師ハ何十人と
なくかへりみ。あるひハ光明寺の修法の祈祷。赤城の神の
張護符中川原の金毘羅とそへ。鶴が岡ハ素足参りに
お百度江の嶋へハ日参する人が十人なり。大家に媚へつらふ
世の人情毎日に見舞て容子を問ふもあれど。そのしるしなき

養生坊文聖と呼る医師ありて。弘く仁術を施しけるにや。やが
て請じて治を乞ふに。養生坊来りて。案じて。是ハ果して
病症にあらねど。恐らくハ人を恋慕ふ念の切なるより。おも
ひくづぼれたる。在斯わづらひとハなりけると。いふに
両親も信じ兼しが。お秋の日ごろ氣に入りたる侍女にさゝやく
のひとへに。ひそかにその事を問ハせしかバ。いぶかしとぞ思ひ
ながらのひまに出さゞりしハ。深窓にのこそびてゆかすぞ。おぼ
こむに理なりと。侍女も辞をつくしく。いづれものあるや。この若

に入りくる男もありしが。今様らしに一とのゝく。二の宮にて此人々
金の山と積ども。おもひきりてい人算さるふなるまじや。
成ねるゆへおなりませね。そさ承屋しくおひとりく。お気ざ
りんぐいあつまつくひろまつく。且那さまや此新造さまの幽霊と
おかけあそばしまして。小門より此不孝になりましたこの一番う
の事があつく日ぼる何をかもおかしいまく。ひとつこゝろもとざお目
ぞあればあそばしまくしこゝろさるのもとしてむかしのゆかりをもつてまつら
くゞぞこさ申ましい人のまふ決しやさまがふよい工夫を付けなさいませ

間ど中と絹をはくしく聞ひろめで。お秋を重き病
ゆも今さしまぐうしきふ話げかねる。まいでしり
うぐ。まざしい人もせぎりしが「そのやよく聞ゆくるりまつご
が病ひとつのハ実ハトゆふんとせしがさるがしまづうくとひらぬ
ござさそへとおともハ氣ととひゆな「どうぞどうぞりまれ「
十二類ひへそまゆゑでもあるまいよ「まアなんでもおつしやる
くんでござれまい「そんなら人にまかせたがよい「なあの人
ふ中子持ち。モシ奉次郎さまぞござりまれ「い人「アノ

碁盤小路の碁さん久 めき「いゝ とよ「竹さんではござりませぬか
めき「きんのむすこしは、そまとりかお刀稽の八豊田町の信さんど
ちう とよ「ハイさやうでもやおげましたマア あすこどうぞ
お門しやうくはやしくてござりますし めき「あそこくかおんよ とよ「どう
もまだ一字せんがまゝ名頭と假名で一字ずつもやつくござん
おいいましか めき「かうで一字ハむづかしいの とよ「きんの河童と
いふ人ハ言伝衛門ざゑもんとハどの字だ。まづそういふ人ハとど
いやせんけれども。箭市さゑもんとハやの字と めき「是ハきつく
居るが子。そんなら アノ む。の字か。うの字じやよ とよ「エ。むの字
と。うの字ではお二人でござりますそのくせ めき「きんのマアト いふ
く一人もひとりそのお方しハどうも添事ハならぬものと
のなら。いづれ死のかとおもひつめて居るト人ト うそとおもふならごさあれ
とよ「おもしめそびせよふそくうの字ともの字とおつ
立ハまへのハ めき「あふさう。うの字かむの字か假名のさ紙
あるねらしよくまつくるとかのさ とよ「へエさやうならその
お前のおい名もよくけでんじではござりませんので めき「何さ

それさへもつまらねへ似たつまらねへなひのさ。梅といふ字だよ。
むめと書てもうめと書てもおなじ事さ「さやうでござい
ざりますか。梅さんと申すハヲヽあの志明屋の事でござり
ませう「なぜへ「梅幸でハござりませんか「マア
梅幸がよいがなアしだよ「まアとんだ事ハ申ませんヨ
「ぐいおまへさんハ知つてゐるのかへ。鎌倉の二人とある男ぶり
でとござりますよ「あの評判の雪の下の尾池小路の人で
ござりますぞへ。それそれその頃見ました事ハござりませんが。

よく人の噂をいたしますが。あの男ぶりの人。そりやんな夫
なまじ四五つとしもおぼへなござりますぞ「アノ内へくる。
郷士奈良さんの息子があるよ「エヽ。さやうでござりますか。
ヲヽあのかお九太夫のやうな爺さんの子に。どうして梅よの
やうな美男が生れてこのやうでござりませうト いふところへ人の来る さわがしいはうから
香ぞ委細のよけはけかさぬやうにしてハ村次夫婦ハ娘のきく
病ひの根が知れて大きにとうとびこまてより急ぎ雪の下
へ使をやるに郷士奈良が地代の引負の未進が数多其外

ゆゑ借用いたしませバ。それを勘定せずにこの使なるかと。ひそかに
ものかく琵琶小路へいそぎゆき。村次に対面しませバ案の外
に酒さかななど出して大きにもてなしけるに。御家来ハなる
ぶるものまで。さてだんだん以借用が不義理になりましたく
とかくるしき思ひいひ出せバ。村次さらにおどろく様子なく
その事ハお返しなさるにハおよびませぬ。いつまでもようござる
といふに。白ほさ合点がゆかず。村次ハかさねて御家来
にむかひ備今日はやく招きしハ外の事でもない。

こちより言憎けれど。娘の重病なる其許の子息梅太郎
に恋こがれての事なり。助るとおもひて聟に呉られなバ
さらバ命の親の貴さまなり。とかく此方へと思へバと。理り
せめて頼まれけるものなり。

仇競今様櫛巻之上終

仇競今様櫛巻之中

第三回　さよあらし

當時村次が妻のお宇津も。一間を出て郷右衛門に向ひ「今
内の人がいやましらうが。殊外の事とちがひ。親の身では
おまへさんもさぞじれつたかろうの事なれども。そこまでいふも
まゝ子の可愛さ。その梅子をバ兼てからかくしくそろり居
ましく寝。やうくのるずく女どのにあづけおきしが。梅太郎

どのハおまへの惣領息子。お大事の跡なれバなか〳〵貰ふ
事もならぬぞ又娘ハひとり子の事なれバとても添ふ事ハ
なりかね日頃ゟおもひ切ますとやかくきつうそれほどぞんじましたが。
漸くおもふなる重病今ハもや燈火の消るを待やうなもの
なればそれにそふる事ぢや呵てハすぐさま死ハ定の
事なればとかくなどもかやうにかしこまりそれに。あゝ程近
にも急ていそのうへまた親の愚痴でハなけれど一時も夫
婦つれそはせてやらねバどのやうに歎くであらうとぞんじ

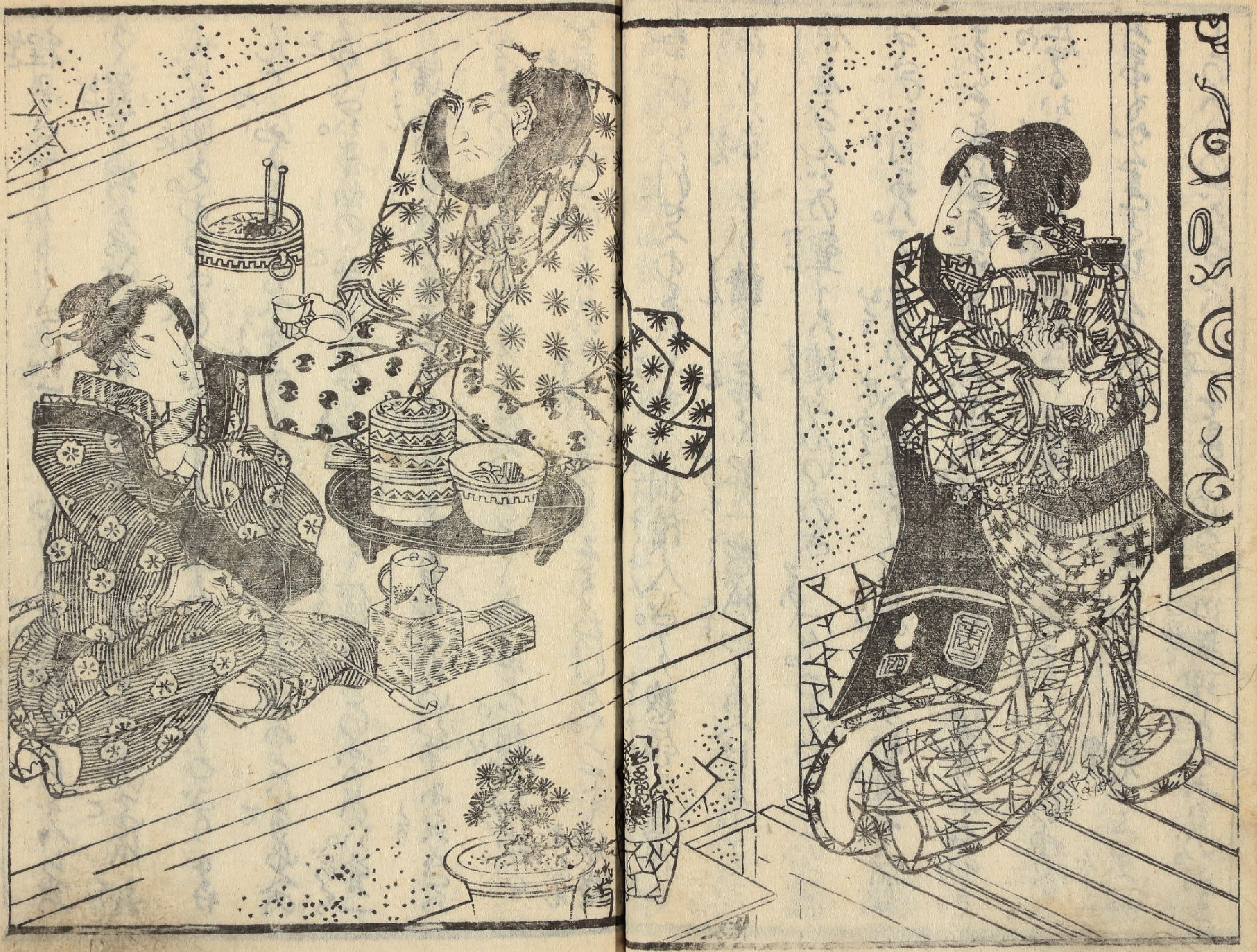
ますゆゑ。まことにまことに無理な事なれど。どうぞ聞わけて
くださりませバそれがしきにそのかハりとしてありがたきのはなしに せがれこの大家へ聟入
させん事はおまへにとつてびつくり一おうは恩義もおよばず思
速ふのことりみて「それハ何よりお安い事とは
いへどもおまへの家の惣領を取子にハいたしても
こちらにも都合もあつてそれがかなひませねハ
と。冥加至極もござりませんなれど梅太郎ハ惣領で
ござりまして男の相続人でござりますそれで此方のそん
なる事ハ申しまして取ます如でハござりません。それ
ゆゑ舎弟

の菊次郎しとやかにござりますればさし上ましても随分
きれいと申し上ますト　いよ／＼村次夫婦ハ大きによろこびて　早々支度をなして出しけり　斯て郷左衛門
ハいそぎて我家へ立帰りて　かたはらより「サア早く御神酒
を上ろ。コレ三郎こゝへ来い。マア／＼飲べ。こりやめでたい燗をよく
つけるのぞ目出たいト　小をどりしてよろこびてゐるに　菊次郎も外へ出て居合せしが　梅太郎女房ハおく
より「ヲヤ／＼何でございます御酒に酔てお出なさりますか　々「酔てゐ
られるものか。悦び事がある。酒の燗をつけさせや「アイ今
お春ハその銚子を湯にまゐりましたらばト　走りゆきしが

どふぞ盃をあげて酒のんどと表へ　ともあれかくも先ヅする　扨も此郷左衛門が尋けるに　次郎へ事を表がら
さてまづ飲べ。何の大家の萩原殿ぞ是非悴の梅太郎を
聟養子にもらひたいとの事。是れ誠に僥倖なる
事なれば。そこで約束をきめて来たト　大よろこび　めでたく
斯の「それハまアまア　おめでたふござりますね。其とき惣領を外へ遣つ
ハおまへの事ハおまへハまたらね　不所簡まあれお春と
菊次郎　まふしわけとすんで申しましく　引けるとや次八
それハどふもせぬる事。勇一柳之助二人が中へも不便なり

又先方も大家ぐ人ふあつまつて大金持なれども。〆夫婦
なかへ人の評判のよいハ人ふちそれを左も右もなぜ父
不孝なるも皆此方なてゝ縁をきらいといふのハ「其夫ハ
あまり人徳といふものが内でハころゝぬんどめ。やうまいの
やし世話好ぶのといふが。おまけ徳満てるものごぶよろしく国
こふかれくこの通り。イヤそやうるさいろうさ時ふさめさ宮
あれと熟烱ふさかれしかい「ハイト酒のかんをなりしくさやうなるぞ
なぜ弟の菊次郎とへ久さる善りハなさいませんハ「ぞうる

奉公なかれせん。ゆまへ此方の相續人ぐアノ惣領の馬鹿野
郎めハ十年むかし續ぐ居く。第一惣領とハ久しけまどもが萩
原屋なんどの聟な随ぶんいのさ「そのへなゝ。こまろくものぐあ
なそのお眼ゆハ。アノ弟の大不孝ものゝ悪ものがお氣ふ入て
まらそまいそれなもしろ。ゆま福ふ夫婦のはのりふなつく
居るお春をバ「こまさく貴さなハのゝようしねといふものぐ
なゆもかくまてちへ今のさとへい中ごおまぶ免して夫婦
といふものでハなきハ「そまハおまて御無理といふものの。ゆま



程よくしやかしてぶすてきにおのれが旨がなるからうちかゝ
く置とおつしやりやす。それでおまへのちゑ門さんがその子孫へとう
ゆづる時そわるくしてつひまがらたすかるさかやアでござりますが
んか「やかましい女さつしやい牛賣そこそこのことをいふものゝの
ことじやエヽ四の五のいふな「そうして縁談といふもののは一番
八當人の心底をきかねばマア當人はもちろんどもいろずにきかねば
ならぬといふ「コレむてのるい殺へくでくしねつきる。親のいふ事
を背くてふがゐのぬめ「イエくそうおつしやつても縁談

ならぬは「エヽ七めんどうな事はぬかすなそんなわからずの安
あふまづおまへとおいつかちくもり金銀そのまゝ捨ておいとこの八
月外瀬ふなが死んだ金澤屋の家財を残らず賣
拂つて金をバあの子の手に付るより妹へあづけて
置たらよからうとおもふところが連て都合がよいといふにより其
金をバちよいとづゝ受取にまた年までおさんが引うけて
のばしてまたかくしてをいてこのこゝうちのへのことゞ知て
妹へかけ付るとは是非のまゝりもう道具ひとつ二膳の

持せたくやうなげなやうなる女へハ。そこづくちくり合せたく
終子が出来ても又ある細工ひ衣物にすまゞ人もの〻ハぞ
よしや子ハできぬとしも。今迄のでゝくして居ても外へ片づけ
やうとしても。一旦梅太郎の女房よろしき女が離縁さ
せこのごと外ハ名づつ縁へハ。そこで兄の野呂作めハよそへ
聟にやりてしまひ。お春ハ菊次郎が女房にづかしへ門より
孫をそのまゝ孫として。兄子細なき上分別ト。てまへの
ずりふかあそのハけう奥さまふへるあまりてでも出ぞ其の顔をとち

まゐりぬるそのところハ表にそそくわまその人清り基
にさるぐれ進物樽さかなをとりそろへ人を内に入り使
の者上下を着し大門へしく口上のべて今日吉日
吉辰なれバ直さま結納を送り申候。幾ひさしく目出
たく納めてござります。明後日ハ最上吉日なれバ聟入の
祝言の用意して相待とり申候との事なる御念の入
ぞくよろこび。結納の品々目出たく受納ていたし
明後日善ハいそげとや申なるまゝ。相違なくはかりしやべしと。

對談してぞ帰しけり。在斯けれバ妻のおやゑの八今更に
詮なく〳〵も悔し泣みしてひとり泪汲出をぞなりけるをこの
折からにお春ハ湯よりかへりきて、始よりやうすを立聞
涙ながらにかけてきたるをやう〳〵梅太郎も用むきをまうひく
帰り来るに、善兵衛ハびつくりして 々「こまつた梅太郎さん大きな 梅「ハイ
モシこの樽肴ハ何でござりますゑ 々「ヲヽ夫ハそちが身の出
世の祝事。目出たい結納よ。コレ其方を琵琶小路の萩
原屋へ聟にやるがうまくいつた 梅太郎ハなにゆゑかくそのやうなことのあるべきや。あきれてたゞしばし

世話し 梅「それやモシあんまり無理といふものでご
ざりますさんどの事ハ當人のまへへハなぜ又お
定らずにきまりをばなさいましたお親ごといふても實
早十五歳以上になりましたら一人前の男といふたのも夫になさ
親じやといふて。此自分の了簡で一應のひ合せもせずに。
縁談をきはめるといふ事がありますものでござりますか。それでも
と左もあらうとしかしそれハお春といふと 々「コリヤ〳〵手まへも
まへにお春〳〵と。あまりひつけうち内證事親の免し夫婦で

なにまで密通の不義の沙汰と 梅「これハ怪からぬ。ことをいふ
眉をそるとき子でも歯黒もつけさせその上に柳之助といふ
「これさ早い道理が女房でなくとい証拠ちさまで誰が
媒人で。いれ結びの盃をしくと誰が謡ひをうたひまし
てさきまへ久をでハかんの懐子で世間のやうすも知らぬぞ番頭ども
つかまゑへもひく出勤しくみんて八理といふその八分
らぬハト いかにおまへかくるをきうどのさば そうろうとむかりなるまいぞ 「それやおまへのぜひさでござ
ござりませぬ。おかみさんもおなまへも以兼如く同床寝姿 「コリヤ
馬鹿のものいひ免許してもよいって。説人ハまでござらぬ我侭 孝太郎
とねらふと追ひ出してしまふぞ 梅太郎もかんぐへつかへ 父の
一徹といひ。ときどきハや番頭らもく。寝草とり出してなること
なれバ。今さら変改ハなるまいけれバ左右ハ只不孝なり。
とかくお春を見すてゞ。柳之助もふびんなり。こやせまい
もやせまいと。途方にくれて案じわびしがよく。あのくハ
大恩ある親のそのうへ又実の子の菊次郎に家督相続させる
あるそ。老ての後も心安かろん。親ハ一命も惜まぬべきにあらし

梅「いかやも何とぞのかへしやうと。委細承知して

ト恕然あつとさぐる隆 やうしと 〽「そんなうつきうと背なう 梅「かしまいますりおしとト

ぞく／＼よろこびて 〽「ヨツく出来やしく。それぞくてそ継子根性で

きみ／＼ながやつくり あゝ。かんの親孝行とやはのめ。コレかやうのサアく喜べくト

ひとりはこく又のや その後そこにおろびねの。ふじの山をや夢

すそ衣かさむけ にみるくん。噫無慈悲なる強欲なり。梅太郎はまだ碁へおそるとよび 梅「今度の

事は宝早くさらかもあるその事は左に右に背く事

あるぞ。猶にそうては紛失ものが荻原屋より大まいの借金

なく急すハ返済もなるまいと。迷惑しく居るくハねのなう。

今回の縁談と不承知といへバ先方ハ定めし嘖ておそ

ゆらうが尋常ならぬ難題者なれバむづかしくいふハ必定

なくなると大切なさてきみの此離義のところ。今の様でも離

きく事ハ縁バかりねやうかもなりゆく。こゝろやに困て一旦

承知しく行ハ何でうがさぞ其方ハ恨めしい男とおもやらうが。

心の中ハいかなるかなるてふ往年や一年別まくおそや。

決てくかゝる事ハなく。いつかもしく先ぐ離別し。是非添

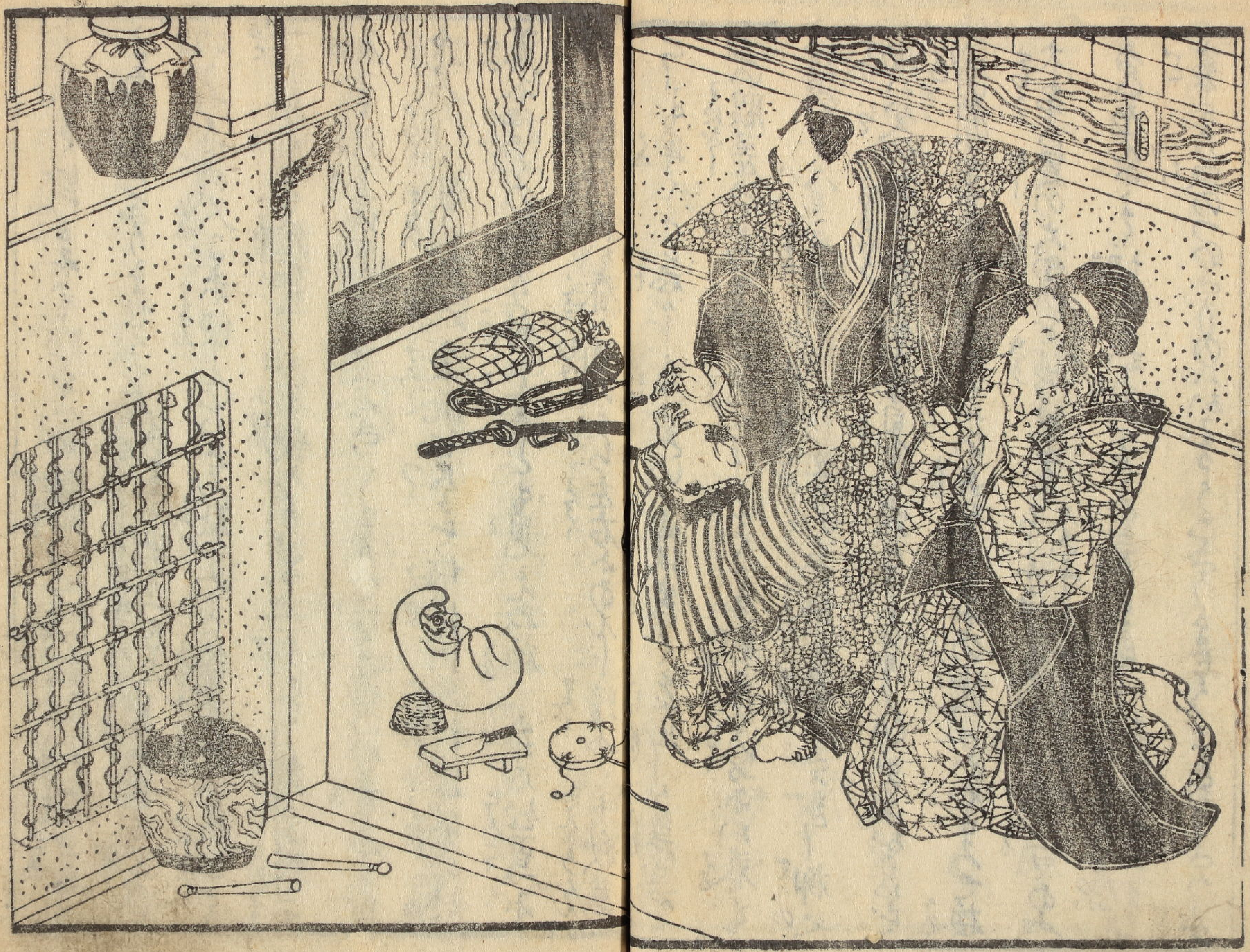
とげるやうにおやう御どの。かねてぞ泣て恨んでゐるは。
そのところがよく聞わけて。アヽさりとはおまへも實の親
なればこそなりといふやうもあれど。義理ある父のいの事
ゆゑ出をバ殺しても詞ハそむくまいとおもへト
なみだにくれてかたられば おやそのかふるどうもやうのなみだ
なさけなやうけてこそ成て
やうかいづきめされしが
それ 三郎四郎あさんすござりやんした衛門とも
ゆゑことお恨さりやれ此ろでござりやせん又とてさの被仰
事も無理とものぞんでやせね。てまてもさぞあるく遠るい
ことはつてこゝへきし実の両親があるならバこのやうなる目にあ
見まいのめ。やかてどりつてこゝへきしが身の因果因縁のつるの
事しぐわきうてあるトおも外ハおざりやせん今のやうにお門
をやるハ。別まる今日の捨詞。たとへ一年が五年過ても。なん
のそうハなりませねつてこゝへハともかくも一生向ることのお側
に居くさぐハ生てハをりやせねはふとうかしなのひろんで
をりませめん。どうぞ跡でもとの柳之助さバいとしびんを抱
てやつてくでさりやんしト まうことぞろうに又なきいだせバ母のおもてのなみだ
暮れくれるうくにあつきうてさ三人が
とのに声をそろへてしまつてハわれまよえりもあかりくさみだり

第四回

実に世のさまの侭ならぬ。あはれはかなきものや吉へとも憂世とて
おそ六唱へし後新てその翌日も泣あかしうき苦しく。実に
三日めハ七日まで。明日の別路今とや惜き門。一夜を千年
万代とも後になりの瀬の有や無や孔関も人目もいとふなる。
容貌に見ゆる幸もうれしけれど。死ねべきどうかたく。
お春が心窓し いてく。涙ハうんと千行の。滝のおもて条縁ゑ
別れ八としの一浮がひらきき縁乃床にるげきよそ明まで

畢天より萩原屋の迎ひの人媒人何かしらんどみなく
相談せきまとまりバ。ちどりハつきうち涙をぞ慰をとすまでほに
出る。尾花が袖を拂ひもの入ね。露にあかれ六母親」や。あをまくさ
なず「コレお春。さぞキア無慈悲な親とうらめしくやるで
あらうがそうもりしが為にハ實の子でも郷まちその為ハ
継子なれ。その義理が何ハ押てもいはきぞ。よんぞろるい
今度の事ざんす梅太郎がひさへかへし後バ。まことよい事しも
あらう何ぞや。一旦ち涙かやさ胸にまやう事がなるい。さぞちひさい

こなたあいさつ。とかく時節を待がよい。此すゑハなにほどさうふへ
さしもむかし いまさら世話をしてやるほどにト
のちの又志して肩衣の背中をなで袴のまへをさ
親のさうよくしん。そのおしつけてあるごとも。いやはやなれ
理の縁 「これもやがてそのうちにおかくる。
孝行をせよトいふもきゝて
何がしてやるぞとやりくト 酒を勧め
菊次郎も大きによろこび。そのあとをもちてざんざめけバ。
こしも早くと急がしたてる。いと両親ハ早く立出しが急ぎこ
つい腰差の小づかを落せしをしらず郷屋へ入るにお春も
はやく入り又さわぐして注進せバ。この時お春ハすぐさま柳之
助ハ父の梅太郎がかたみを見てあつたりとうちひらきおのれが
胸にあてさしとおさがすくつい九おとしたその小づかをやまつて梅
太郎ハ足の太もゝびを切つけたり。ちしほがながるゝをおさへ 「それ見ろ
なんなくよく切ると小づかでごさりますト
事にハ血のついたものハおはやくこざりますそうでござりますが



いつ〳〵までもかはらぬこの像見とて　わが身のふつゝかより見で

よろしうござりませうと　いふうちにもせきくる別を忍ひ

切りつゝ世の人は未練といはん恥しやと梅太郎ハ立出ぬ

一おもひのまゝ跡をいとしハ不便なりける次第なり然るに蔭ながら

屋うるくハ上城下へとどきくれ、そりや婿さまのお着ぞやと出

迎ふ人〳〵宅内の人立派と尽くす婚儀の大礼蓬莱の島

臺に種〳〵のかざり付けれども見えね梅太郎ハ心に馬に

あかぎれば只いゝ春が胸のうち左右にあんじ煩ふて千秋萬

歳の祝言の盃も、ことしもとのまゝなるべし。花嫁は

病中の事なれども。恵智の梅太郎を守るものとせん

と極まりしより心に浮るゝ事なく。床にたゞ元結髪

とかきあげたるに美しき女ぶりハ春ゆゑも少かるまじく。梅

太郎も心ならぬ事わしてりせぶこの新枕のいかなる樂し

かりんぶ春のなげき心みとそまいだ。顔すハ出さねど胸に

まづかすしさあぞそのそてやさるハ。なほむとしかなる三酒

かもあろうくぞろちあしいるが秋の露たくござれば。おの

そやうる時の事より。つゞく着つるその宵を逢まじと思ひ
死ぬべしと。覚悟きする事までも。残りなくものがたりし
まじぞよ。梅太郎の耳へ入しぞよ。泪ながらに挨拶しつ。一足
よ天の明るのを今やと待まらく。東の志らむに比れひ
名残をしくも。逆ておろ八幡宮へ因みを義段をとるまで此ほも参り
さし彼小づかよく切ちる
小つかりてきく。かでさおせんとお春が志まひおしたるがの
のやえやまりて。不可なる事も叶はせぬると禁じらすり。

お春とおゝしつゞきあはうしとおほへ斯もいつかりけるを
ども。村次夫婦ハさまでゆるさず。三月も過ざるうちに外へ
出る事しるりがたし。鶴が園へ代参はせさるべしとある
にせん方なくも止りけり。斯くて一日と百年のやうに待く
待つ三月の祝義もをこりてその翌朝未明に鶴が岡へ
とらわれて子僧一人を召つれて。急ぎつる実家へ参り
ありく見るに郷が家ハ前夜無尽へ出きたるよしにて
眠りとおもへしいまだ起ず下女と母ぞりのみある所にて。

ろうとあし　わのが部屋に入りゆくに。お春ハ蒲団を出しける
まゝゆく床もとらずで臥衣も着更ず幼子の寝ぬる枕上
にうち伏て。泣つゝ眠て居る顔さへ消かゝりくる行燈の
火かげにちらつく〳〵。めつきりと痩るやうにみえて。目もとの
赤く泣たらし。髪の毛額にかゝりしさまハ。みるにあはれと
そのまゝよりそひゆりおこして　梅「コレお春あんまりきつさ
。おどろくことがあつて来たが。まあ〳〵かゝることもあらつ
てトツひつくりかへしけてすまず。お春ハ涙にくれてよく
来くださんしたと。いはんとすれど口籠りく。泣音をもらす
る千筋の涙ハしとゞに袖にあまりけり。郷右衛門ハ目をさまし。兄
ぞくこのよし承りて。両人がすこし休のちかくこゝに入り。わが身
何の事にかへりましぞと。ゆひさるを打くかゝりけるが梅太郎ハ
当ぐにあやまりて。只ちよつと親父さまの此機げんきつゝに
来ましたれども。まだ親出の御名をさへ聞きうつびしに。
今郷右衛門へこりしで詞をやらしげ。夫かまをすぞ早く
帰りく。この後ハどのやうなることもあちこちの両親を実家の

親を敬ひ。大切に孝行せよ。釈迦に仏経あるが。よく胸にとゞ
ためしありてその徳に。早速に追ひやられけり。

仇競今様櫛巻之中終

仇競今様櫛巻之下

第五回　花ぐもり

偖も荻原屋にては。お秋が病気は漸くに愈ぬれども。お秋へ
何る時筆に入りの侍女お刀祢にひそかにいひふくめおきてまつ
死ね汝といふことぞまことしやかにいひふらすも。其方のとりあへず今死如く
ある事はうまくしくまゝに成させてありしかどもその梅太
郎さまさのと邪見にても手く。よく情ふかきやうすなく何ともなき

さる夜も倶に寝るといふなどり。かゝる名だゝりの夫婦なり
されども女ハ男を夫として。朝夕願ひけるうちいふ事ハいはう
病気ハ日まして重れども其の下紐ハとけしが心さへあかひかと。
うちかとてもちくものがありし。されどもやがて長い年月の間にハ
まくおもひの解る事もいつかかどそれのミいのりく待ちぬり
といふ心ハ日々神々を祈りく。ある程聟さるのお数つきどうら
物をひのひかるやうとハ両親さるゆむさんどお事に入の結構
る聟さるゝれど。四苦言ゝれあるやうる処。とらくふハ姿あらし
まうもと物がてりとるゝけるが。その国郷さなハ書状ゝて家
ふ村次がわしとひひ越しるハ。梅太郎るゝ当分けして他へ
かん岩しゝでござるましくと記し。ゝ日かのお春が事とを巨細
ふゃ灘へしけれバ。原来とあのかゝの此後ハ門へもいでざる
やうふしるく蜜ありしとぞ。斯りけれバ幾日とるても梅太
郎ハ尾池小路へあらざれバ。お春ハいとゞふ寄じくまづく伺く
るきぶんあしくて。食さへろくく喰ハざるふ弟の菊次郎ハ。
左右の月縄お春ふつきまとふて。さなぐふかきこ口説けバ。その

時〻に恥しめくらしつるなすまでも。親の馬鹿押のつよかたと
受つぎてぐ面の皮厚くもいひ寄りけるが こけるよき まゐりそ 菊「コウお春
さんあんまりそうかせの後生三絃の糸のやうふつゝく
とするこそ殺人お千代といふものも。まア情をしらぬ殺人のでせ
まア「おまへといふものもまア義理をしらぬ人で又仮なる一旦
お兄いさんの梅太郎さんと夫婦ある所にまアし 菊「なんの
そりやア内証るぢやソレ親父がいの分ひやしらず。いつ盃を
とりかはしく。その時の仲人ハまだ上下を着て居り込で
ござる謡ひ抔うくうくさ。そして何流のうたひでも節の数ハ
幾つもそりやわるし。ソレ此間ちやア一言もいひよう句が台所と
豪気しく兄貴ハあまてのゐまで。うらくしめされて居ん
聟入その節は某が宇治川の先陣と繋がる気ぜんさ。
孝そこも佐々木の四郎といふかたやまで。米沢町の◆屋も
是迄へくわりを海も皮むや丸むきしるかその容顔美麗
どうぞまア見てくわかまるのがそして実ハ親父もおかく
ろも。お千代とあつて北の方ぞ台所ときめるといふまでやせ

ちる「うそ花なきことゝ［ほんにそれぞやおちうがものがたりを　さらさらせしにそれがそのまゝとおもへなる］菊「十二嘘を
いふものゝなそしらくまづ兄貴をはじめあつちのゝお秋さんに
命と惚られたが。今にやつのや腎虚するだらう　ちる「お秋さんと
いふハお美くしいそうだねへ　菊「いやもう美しやかん艶しとや
かん美艶仙女香京橋南てん馬町坂の氏といふ　ちる「そう
しく年ハいくつぐらゐかいへぶろけねへ　菊「年ハまづおよそ
好な讀本ぐやさうりのるしバ青春十六霄月ハすぎて
十九夜月すハ見かけどもとうんある女のいと清らの衣を容ち

なるさま。嬋娟とこまやかし。悩めるさまハ海棠の雨を帯
たりしがごとく。露にそぼてる大液の芙蓉に似たりき　ちる「
なかも悩めるさまハありさうもないのだ罪ねへ　菊「ほんに
まだ天にあらバ人とあつく言しむぞ。つハ我を忘まで
おひ出しやし。實を兄貴のよ死ねほどおもふて。恋病に状
ひ出しく。大病といふものぐらゐよんどころなくのちてこのさ
れが病氣となりまちに愈ぞくなつくかゝふ。この節でハきぶち
殺しても死にそうもなく。口に梅を雨となり雲となるとき

むかしなじみのかそうらき「そんなら子トのりやかんに
ござりしく此頃は久しくお出ぐなさらぬね。菊「何のモウく
ひげつのぐこそ前ゆうきまへぬすらんふてうちびきの親
父の逆へ手向ぐくんてずいやしやう氣の毒なやうでおつ
まりよもうんとも。おんなゆも中がよくできるものかそま」
ぢう内のみのぞアおのひ出さまへどの事さトとつり
とうぞ国へひくべきに、ぬけ出のつくろうは ぐるの衣類ぐ見ずれつまぞ
菊「ゴウなびけへかんなさへやさ。
あなた兄貴よりちつと男らしいようちのいふことを聞せ

ゑんよトつくをこの折から むかむかの若すがり 母のおやの人柳之助どのそだて居
るが又菊次郎やがうるさがらせるかとおのひそひそ入りたり。
柳之助ハお春ふつきそで 菊次郎ハその 菊「アヽこころびを縫く
からつく大きなほうつる 母「つをを扇の口すぐくぬつくのしくべ
いつの菊「ヘンちんげへわへト早くつまで ぐくやく家すまくお京へ菊次郎が
物がなりし荻原屋のやうす紙にのつくしと見るまゝ此ぞら極太
郎が一向ふ来ずるのぞが便りがしねをゐるべき衣丈さへなきに
しや菊次郎のいひなるでなまんとおのかよやし考へおん金だ

阿姉を棄て
梅太郎夜
養家を出奔す

一徹なる御気質の。どうぞ菊次郎の妻にせんとすれどやうこそ。
又菊次郎ハ朝夕つきまとふてふりうばゝせんと沈思よ
ふまでうらがきそれも言ふるせし人の聴まで心がかりせんとかたく
ぎりし。今さら存命ても楽しもなきことゆゑれバとて。
この家ひそかに書おきをのこし。志てかくつねづねの寝
顔はらくらくと心のうちぐいとまごひ。遠者ぐ居よと抜
ことさら落る泪の顔にかゝりて。目をさむりに目覚る我子稚
りんのこしと乳房と含ませやうくゝ眠らせて。像見の小
づる懐中し。立出てハ又立かへり。こまざ親子のつきぬ路と。
身をぐみしてぞ泣伏しろがたんや丑の時の拍子木に驚かされて
そこしらのむし。火へ入わしがてて水の沫と。消んと心一決し
そろりと忍んで立出つ。滑川へぞ走ゆける。

第六回　花のふる里

山鳥の初尾の鏡掛まで影をうつさぬ人ぞ恋しきと。俊
頼朝臣の詠に似たれど二世の夫と引分られて。涙に身をうく
一人寝をする実より。一期の山鳥のその名ごり尾の長き憂世

に又何事か楽しみせんや。さるに菊次郎が冥途に先きに説れ。
既に父上を誘ひ。菊次郎がおそばへまゐりしく。我もともどもその
通ひまく思ひ知りても去りかねて此世にのこりし。如何なれば
和合させ早くわかれせんと計る様子に。時々母上にもならば
さが又せんくるしくも生きて此世に何しよしとて。浮き
世に出て夫を待んと女心におもひ定めしも。たゞよろこびも
なり。嗚呼ぞ薄命なる阿春が身。憐むべし。
其夜滑川へ急ぎ行き岸辺にたゝずみ日頃念ずる観世音の
名号を数返となへ祈りて唱へ奉り。願くは極楽国土で
亡き父母に逢はせたまひ。又陽間なる伯父伯母並びに郎君梅太
郎との無病にて長生し。未来を何とぞ分けて待蓮葉
に招き給へ。又乳母の柳之助何とぞ息才に成長し孝行
を尽させやう。守らせたまへと幾たびか祈りて。涙と共に
念じ終り。逆巻水の正中へ合掌しつゝその儘ざんぶと
踊り飛入たり。惜むべし在斯婦へは多く浮る事かなし
しまたる此とき梅太郎は夢ともなく火のつくをも

玉琴三絃のわざも興ある音曲なりとて坐につらなりて。
意なきあんじ具へけり。さま[illegible]この程厳しく命じて。
外へ出る事なかるべし尾池小路へ入る輪その外へも出
分ハ文通だもさせざるべしとかたくいましめらるゝほどに。おさき
お春のそれと聞出しく。歎きいひつけあるにぞとて。推察し侍
むねをさすり。うつくしき楽もなに口に美味なる食べず。お春
が歎きをあんずるより。更に喰ひも細りてぞ。見かねて見ると
夜の目さへろくろく眠られざるまゝに。今日ハ如何して機嫌を

なぐさめんと。いろいろに評定し。秋月も相談するに咄が
詠歌を好みのおよしるまゝ。和歌の書籍とおなじく文庫よ
り出しそ。その道知りたる人としきる。かゝ咄もするなるが。
すこしかうきくしまるゝにらんかまへ有あふ男女ものまねせ
ぞ。いろさめ琴や三味せん笛も太鼓も。遊芸ある限を尽し
拳も一ツとしく。気に入りたる容子もみえざりしとぞ。
是より父の主もかくと告げるに。そまへさあひるるか。道おろ
抱へる侍女に元来。梶原がへる奥つとめして。和哥なよくし

手跡をよくせしゆゑに。お気に入りて身ひかされしが子細
あつてお暇出でたるが。その親なる者ハ大地代の貸金三十両ばかり
ありしを。催促するといへどもなかなかにもてゆかず。是非なくその女を奉公に
だされしよしの事。給金もてかへしつれど済ぬ五両を則ち
かし抱へるが丁度さいはひなり。それよりしとやかに身ぶりもよ
まりて彼女名をば糸萩とよびける故。容貌よくハお糸とよび
なされ。すがた風俗も美しく。座に出て機嫌よく。なまじの
むずかし物語なんと志てありける。一モンおもてなるものをおさ

づまりおやうぶお糸さん。アノ梅といふ字ハうめと書又
むめとも書が。どちらがよいのでござりませう 「ハイ梅ハ
うめと書のが古い仮字の例で。むと書ハ後の事じやと
やら云ふ事で。和名抄にもやまとむめの字を用ひましたので
梅も馬もやはり。ほかのものより風がいかにもじやうとでござり升。
まアうの字が本の事でござりやすのさ 「あゝそれの附
わんはなくてうがとまへてゐるがわってゐるよう 「わんは若旦那さま
ぱどのやうな若旦那新造さん衆おきれいなり 何をすぐしても宜しう

ござりませぬ。ものゝやうにまをすが。りんに定まりましてその四季を
わけ何しましたものでござりますへ　と「これハ源氏の湖月
抄で。実ハ浮舟でござりますぞ。ちら〳〵の八古今集。まして
ちら〳〵の八千載集ぞその「モシこれハあたらしい名でござりまするね
「かんわさふらうさ　と「まあてござりましく。まつるかなし。
つるへ本がござりまするね「うにあつたい本でハなし　と「
きやうでござりまするぞ。どれ「鉢見せてしまう。とりけて ひよいとそ成
ほどなくへ画ハありませんぞ。と「これハ清少納言の

ござりまするもの此「夜をこめて」とあり。此の清少納言の歌にて
しやれたる哥ハござりまして。なぞでござりまするね。鳥の
空音とまをするのハ。空へ飛ぶ鳥もありませぬと人「それハ
ハで。後拾遺和哥集の雑の歌で。詞書の長いうたでござる。唐の
孟嘗君の故事でござりまする。ときに秦王にとらハれたとき
やうやくに逃出しまするとき函谷関とまをす関を夜ふかく越るに。
家来の中に鶏のなくまねをよくする人があつて。そこで鶏の
声色をつかハせると。夜が明たと心得て。その声に催されて。

ゆかりの鶏が二声が啼てふようく。関の戸も明て通し
たこの事がその傳は史記の列傳にござりまするト
あがり
する処を梅太郎も好の道なれバ。耳をそバだてその婦の
才を感じてすこしハ心をうごかさるゝやうにおもひけり。あるふ
云ひその函谷関の故事の物語りするに思はず。わが身ハ我も
とらはれし身のうへ。なにしてかえさどのがれ出ぐ。ひとたび
ハ是非もなき危急に逢ひしもの。この間も夢に見ハつるし
かんどの云ひや婦を物おもひも。やくしく筆に譲の道乃。

物がたりなれど何をまをとするに。この女ハおもひの外学才
ゆかしく至極おもしろかりけれバ。粗奥に入りしとぞ。又おなごもおなじくおもひ
「モシこの大和物がたりとの事に女が身を投るがありけ
がふりと落入りねとゆうまほよ。おもしいね。何も浮ぶりと
書ぞとものすまぞね「ハア「そこハいく田の川へ身をなげて。ひら
そりの女のなりぞうぞいまするか男二人ほおもハまくし水ぎわ
瀬く中ごろ男へむこうふとやけれバ。一人ハ腹に射あて一人
ハ尾のうへ射あてしとやく。そまでらく争ひふなりまするので

住(すみ)よしハねつらが身(み)をなげたん津の国のいくた川も名(な)のミなりけりとの歌(うた)をよんで身をなげしとやいゝし紙(し)わきハせんとハ万葉(まんえう)の九の巻(まき)にある莵名負處女(うなゐおとめ)のことで紙花山(くわざんの)院(ゐん)の大和物(やまともの)がたりにもうりこんだのあやまり聞(きゝ)じるでござりますよ ひやく「なるほど死(しな)ぬとものなれず。かみ「お客人なるほどかしこ ひやく「それこそしかしばかりの面倒(めんどう)なことなれ。一人(ひとり)の亭主(ていしゆ)ならまだしも一人ハ男別(をとこわけ)すてよく悪(あく)のさ 手(て)まこれしまで一月がつのいは亭主めしくやるようなのおゝね。

とんだ不意気(ぶいき)なまねをやまなつまらない縁(えん)へ 人(ひと)「そんなら さまこうかせんでござりますが六十七八になるやうな美(うつく)しい素人(すしろうと)の娘(むすめ)が滑川(なめりがは)へ身(み)を投(なげ)て死(しに)ましたそうさ 上(かみ)にのめりかゝりし梅太郎ハ
梅「そしてその女(むすめ)ハどこの者(もの)だ 人(ひと)「さればその娘(むすめ)ハよく知(し)りませんがなんでも丁度(ちやうど)こしらへが武家方(ぶけがた)へお目見(めみへ)にでも出る仕(し)きせの様なこしらへでござりますそうさ 梅「ムゝそれハかわいそうなことをしたの 人(ひと)「聞(きゝ)ますハさ 人(ひと)「花水橋(はなみづばし)の辺(へん)の人が遠目(とほめ)に見たけりよくあれとさんごゝへおつけて気(き)のどくらしいの。飛(とび)こんで来ましたやい

ふところへいれしく後ハ守り袋を木の枝にかけく。鼠を
びろうどの雪踏がありしを脱でおいてこれに乗てござり
ますと、接たる鼠びろうどの。そしく守り袋ハ。人ハどうぞ
せめてものも入れしなされて、ひとまがりもあらうに守り袋
の中にあけてみましたれバ、なにの御札が這入く。その中
に大腰の緒の書付に建久二年辛亥の正月幾日と〆れ
生年と初名ハむつと書てありましたそうでござりましたト
きいて梅太郎ハびつくりぎやうてん此お春がとき子名ハ。正月に生れましたれバむつき
とよびしよりおむつとつけしよし。そのうちちかくなると夕飯
なるよしふりつゝく物がたりに伊八が姉妹しく、ねる事も忘に
あまりにおどろきその紙もはなさざりけ出しんと思ひつるが、さすがに
人目あるにかわりて、あくね顔にゃ出さずかくし、やがて寝所へ入り
けるにみ物し退きければ梅太郎ハ顔色かわり。悲しきのみ
胸のさわぎまされて。寝らるゝ事もなく考へ居るうちお秋
も来り一ツ衾着に入りて寝るが梅太郎ハ此ものを
あくてしくすれを向き眠り。しきなりしがお秋が眠りしを

うかゞひゐたりしが。縁より付ゐるさまなるすぞ。其門とねば
出雨戸ひきさし植込の松より塀そのりこえやうやく表へ
立出つゝ。裏の田より木戸と開き裏店の路次づたひ終に
のがれ出て一のしきんに雪の下なる尾池小路へ走り行

第七回　かへり咲

却説お春八滑川へ身を投たるが宴にこの辺より大畑村の
漁猟師網八といふもの毎夜此辺り川にあみを投て魚
をとる渡世とせしけるが今宵よりの暴雨り空に宴て猟の
何るらんとて。例のごとく投網しけるが宴に重きあみや
しきその網引上て。何ならんとおもひしが。やうやくに
船に引あげ網をとき見ればよく見れば是すなはち
死人なるがありけり。雲間の月のかげにすかし見れば
まことに美くしき美婦にて年は十七八なるべし。又云ひ
殺害に逢にしにもあらず身を投けるがあらたらしく見え
その衣むざくと押流しそのにはかに火に倒てあしを
吐せ薬をあたへるに百に一ツ蘇生しける事もあるやうにぞ

ときに。そのまゝ舩際にこぎよせ。まづ死骸をおいだし上
て。窟に枯木を取あつめて。火を焼つけゐたりしが。工夫さ
水を吐すまでおびきだし吐いだし。まづ入水して居も
おきてとりなをし。乳の下に何てくさ[?]あたゝめ。是をさすりに
この焼火にてゆりてあたゝめ。ねんごろにいたはるうちに四支
冷くゆくるもすこし／＼とりてかくなり。六脉次第に鼓動し
稍人肌になるほどに耳につけ声かけて呼びかへすに。
やうやくよみがへりいづき。既に蘇生ありしかば。綱八も

よろこぶ事大かたならず。すぐさま背中に負て
いそぎつ。我が家へ立帰りけり。

○此綱八も信切なるか。不実なるか。其善悪はのちへ
梅太郎雪の下へ続く奈何なる物語かある。
都て後編發市の期を待て見るべし。尾
ひれはいろ／＼おもしろきことのかずありて多くしるし。三編
にいたりて首尾全うせり

仇競今様櫛巻之下終

盛中